

長野県伊那弥生ヶ丘高等学校合宿所建設事業

上ノ山遺跡

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1993. 3

長野県伊那弥生ヶ丘高等学校
伊那市教育委員会

長野県伊那弥生ヶ丘高等学校合宿所建設事業

上ノ山遺跡

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1993. 3

長野県伊那弥生ヶ丘高等学校
伊那市教育委員会

序

このたび、長野県伊那弥生ヶ丘高等学校において合宿所が建設されるにあたり、上ノ山遺跡の緊急発掘調査を実施いたしました。

上ノ山遺跡は、昭和43年のグランド造成工事の際に遺構が発見され、堀口貞幸氏の調査により、明らかにされました。

今回の調査の結果については、住居址2軒などが検出され、土師器などの遺物が出土し、奈良・平安時代この地における人々の生活の一部をかいま見ることができました。

近年において開発事業などの数は増加の一途をたどっている中で、埋蔵文化財の保護につきましては、現状での保存がいちばん望ましい方法なのでありますが、大変むずかしい問題となってきております。私たちは、発掘調査の結果を記録保存という形で残し、先人達が遺した貴重な人類の足跡を後世に伝えていかなければなりません。

今回の発掘調査にあたり、長野県教育委員会文化課及び伊那弥生ヶ丘高等学校職員の方々のご指導をいただき、発掘調査団長の友野良一先生をはじめ、作業員のみなさんのご努力により、ここに無事報告書を刊行するはこびとなりました。

ご協力をいただいた方々に心より感謝申し上げるとともに、この報告書が今後教育文化の向上に活用されることを願っております。

平成5年3月

伊那市教育委員会

教育長 宮下安人

例　　言

1. 本書は、平成4年度に実施された長野県伊那弥生ヶ丘高等学校合宿所建設に伴なう、埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。
2. この緊急発掘調査は、長野県伊那弥生ヶ丘高等学校の委託により、伊那市教育委員会が遺跡発掘調査団を編成し、発掘調査団に事業を委託して実施した。
3. 調査は伊那弥生ヶ丘高等学校テニスコートへの合宿所建設予定地内において実施された。
遺跡の略称はUEYとした。
4. 昭和43年グランド造成時に調査された記録報告は、「信濃考古第25号」（長野県考古学会発行）に掲載されている。
5. 本書の執筆者及び図版製作者は次のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章第1節	早川 宏
第Ⅱ章第2節	松島信幸・寺平 宏
第Ⅱ章第3節	早川 宏
第Ⅲ章	友野良一・早川 宏
図版制作	友野良一・早川 宏・松島信幸・寺平 宏
写真撮影	友野良一・早川 宏
6. 本書の編集は、主として伊那市教育委員会が行った。
7. 出土遺物及び実測図類は、伊那市考古資料館に保管してある。

目 次

序
例 言
目 次
挿図目次
表 目 次
図版目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
第2節 調査会の組織	1
第3節 発掘調査の経過	2

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置	4
第2節 地形及び地質	5
第3節 歴史的環境	7

第Ⅲ章 調査

第1節 調査の概要	15
第2節 造構と遺物	16

まとめ	22
-----------	----

図 版

参考文献

擇 図 目 次

第1図	遺跡の位置 (1/25,000)	4
第2図	小黒川扇状地全体図 (1/50,000)	5
第3図	小黒川扇状地東部の西町地区地形面 (1/20,000)	6
第4図	周辺小字名図 (1/6,000)	9
第5図	周辺の遺跡分布図 (1/20,000)	11
第6図	遺構配置図 (1/100)	13
第7図	調査範囲設定図 (1/2,000)	15
第8図	第1号住居址実測図 (1/60)	16
第9図	第1号住居址出土遺物実測図	17
第10図	第2号住居址実測図 (1/60)	18
第11図	第2号住居址出土遺物実測図	18
第12図	第1号土塙実測図 (1/60)	19
第13図	第1号柱穴址実測図 (1/60)	19
第14図	第2号柱穴址実測図 (1/60)	19
第15図	第1号土塙・B地区出土遺物実測図	20
第16図	昭和43年調査時出土遺物実測図	20

表 目 次

表1	周辺遺跡一覧	10
表2	出土遺物	21

図版目次

- 図版 1 試掘調査状況
- 図版 2 上 A地区調査状況
下 B地区調査状況
- 図版 3 上 第1号住居址
下 第2号住居址
- 図版 4 上 第1号土塙
下 柱穴址群
- 図版 5 第1号住居址カマド・焼土塙・第1・2号住居址遺物出土状況
- 図版 6 第2号住居址・第1号土塙・B地区遺物出土状況
- 図版 7 第1・2号住居址・B地区出土遺物
- 図版 8 第1・2号住居址・第1号土塙・試掘調査出土遺物
- 図版 9 上 造跡説明会
下 発掘調査に参加された方々
- 図版10 昭和43年調査時出土遺物
- 図版11 昭和43年調査時出土遺物

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

- 平成4年4月 長野県伊那弥生ヶ丘高等学校合宿所建設事業に伴う上ノ山遺跡の保護協議を行う。出席者は、伊那弥生ヶ丘高等学校、長野県教育委員会文化課、伊那市教育委員会。試掘調査を実施し、その結果により別途協議とする。
- 平成4年6月 伊那市教育委員会では発掘調査団を編成し、調査を実施。

第2節 調査会の組織

伊那市教育委員会

委員長 下平繁（小田切仁）
委員長代理 兼子康彦
委員 小田切仁（岸敏子）
委員 岸敏子（小松光男）
教育長 宮下安人
教育次長 有賀博行

事務局 小田切修（社会教育課長）
林俊宏（社会教育係長）
渋谷勝（青少年教育係長）
浦野節子（社会教育係）
城倉三喜生（社会教育係）
早川宏（社会教育係）

発掘調査団

団長 友野良一（日本考古学协会会员）
調査員 松島信幸（第四紀学会会员）
寺平宏（第四紀学会会员）
団員 柴佐一郎 堀橋程三 大野田英
小田切守正 酒井幸子

第3節 発掘調査の経過

月・日	日誌
6. 22	発掘機材を伊那市考古資料館より運搬し、現場へ搬入する。南北方向にトレンチを設定し、東方より第1～第3トレンチとする。 午後から重機により表土の除土を行う。土器片の出土があった。
7. 23	第2・第3トレンチの掘り下げをする。午後第2・第3トレンチを北方向へ約5m延長する。第3トレンチより住居址の床面が検出される(第1号住居址とする)。 第2トレンチから住居址が確認される(第2号住居址とする)。
7. 25	第2・第3トレンチをさらに北方向へ延長する。 長野県教育委員会及び伊那弥生ヶ丘高等学校と保護協議の結果、引き続き本調査を実施するものとする。
7. 26	住居址が確認された調査地区の北部分をA地区とし、A地区全体の表土の除土を行う。
7. 29	本日より本調査に入る。 第1号・第2号住居址の掘り下げを行う。
7. 30	雨天のため現場での作業を中止とする。
8. 1	第1号住居址ベルト取りはずし。灰釉陶器片、墨書き器片出土。 遺物取り上げ。
8. 2	第1号住居址掘り下げ終了。写真撮影・平面実測を開始する。
8. 3	第2号住居址のドットマップ作成、遺物取り上げ。写真撮影の後カマドの断面実測を行う。
8. 4	第2号住居址の平面実測を開始する。土塙の検出があった(第1号土塙とする) A地区の断面実測をし、出土土器の洗浄を行う。
8. 6	A地区的全体平面測量を行う。第1号土塙の掘り下げを完了し、平面実測を行う。
8. 14	B地区的表土の除土を開始する。
8. 15	B地区的掘り下げを行う。ピットの検出があり、掘り下げをする。 B地区西部分より縄文土器の出土があった。
8. 16	B地区断面実測を行う。
8. 17	午後弥生ヶ丘高等学校の3年生と一般を対象として現地説明会を開催する。 出土土器の取り上げをし第1・第2住居址のカマドの掘上げをする。

	B地区の全体平面測量を行う。
. 20	B地区の埋め戻し作業を開始する。
. 21	午前弥生ヶ丘高等学校の3年生を対象とし説明会を行う。 調査地区の埋め戻し・整地作業を終了し、発掘器材の搬出をして現場での調査を完了した。
8.	報告書作成のため整理作業を開始する。
11.	報告書作成

発掘調査に深いご理解とご協力をいただいた方々に心より感謝申し上げる次第であります。

第II章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

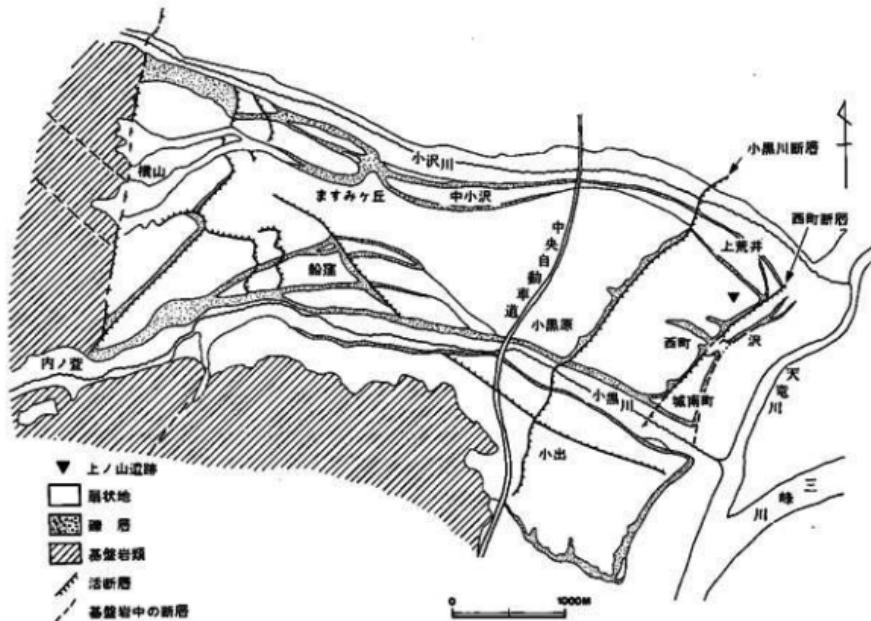
上ノ山遺跡は、伊那市街地から西部に広がる小黒川扇状地に所在し、長野県伊那弥生ヶ丘高等学校敷地内に位置する。高校の所在地は、北緯 $35^{\circ}50'08''$ 、東経 $137^{\circ}57'10''$ で、標高682mの位置である。



第1図 遺跡の位置

第2節 地形及び地質

上ノ山遺跡は、小黒川扇状地の扇端部に位置する。小黒川扇状地は小黒川と小沢川にはさまれた部分を主として広がっており、一部西春近の小出地区が含まれる。扇頂が内ノ蓋で、扇端の西町城南町まで長さ6kmである。この扇状地は小出地区を除くと、ほぼ四角形という面白い形を示す。扇頂部は内ノ蓋から横山まで2km、扇端部は小黒から室町まで2km弱だから、扇状地の面積は約12km²である。小黒川扇状地は中央アルプスの将英頭山(2730m)から流れ出ている小黒川によってつくられたもので、扇状地を構成する疊層中には源流域に露出している木曾駒花こう岩が砾として含まれている。扇状地が四角形を示すのは、この扇状地の発達している場所が中央アルプスを縦切りにしている境岬断層など断層の影響によるものである。また、扇端部は小黒川断層や西町断層によって切られ、それらの断層崖や接曲崖によって扇面が段丘状の地形を呈している。上ノ山遺跡は西町断層の断層崖上に位置している。



第2図 小黒川扇状地全体図 (伊那市教育委員会 1992年に加筆)

この小黒川扇状地は伊那谷の扇状地の中では新しい時期の扇状地に属する。伊那市周辺の扇状地と比較すると、三峰川の六道原扇状地がすっかりできあがった後でできた扇状地である。

小黒川扇状地東半部の地形面は概観して3段の面に分割できる。上位面が小黒原地域、中間が西町地域、その下側に天竜川に面した河成段丘状の地形を示す城南町地域がある。

小黒原地域と西町地域は同じ年代のテフラ層を被覆させているところから、もともとひと続きの扇状地であった。小黒川断層により扇状地が二分され、断層より西側の上段地域と断層より東側の下段地域とに分かれたのである。小黒川断層は西上り東落ちの垂直変位を示し、右横ずれ水平変位を持つ活断層である。

西町面は西町地域の東端部の一部で、この部分のテフラには風成の三岳スコリアが存在する。ということは、西町面が小黒川扇状地の中で一番早くにできた部分である。西町面を囲んでいる小黒原面とは地形的な段差が見られないが、一般に、新旧扇状地の地形面が重なり合うとき両者の間に侵食崖にあたる崖が存在しないことも多い。それが扇状地地形の特徴でもある。第3図に小黒川扇状地東部における地形面区分を示した。この区分は扇状地面のできた順に区分してあり、地形面の標高や連続で区分したものではない。

(松島・寺平)



第3図 小黒川扇状地東部の西町地区地形面（伊那市教育委員会 1992年に加筆）

第3節 歴史的環境

伊那市における遺跡の包蔵地・古墳時代の遺跡は総数300カ所余を数え、上ノ山遺跡の所在する西町地区は多くの主要な遺跡の密集している地帯である。特に伊勢並遺跡は旧石器の遺跡として注目され、八人塚・孤塚の古墳群があるところもある。伊勢並遺跡からは、先土器が発見されており、縄文時代では早期の格子目の押型文土器や斜縄文土器、縄文時代早期末の土器、縄文時代前期初頭の木島式土器、縄文時代中期後葉の住居址一軒も発見されている。

本遺跡周辺には、宝樹山蓮華院圓福寺・種月山長桂寺・荒井神社・春日神社等の寺院や神社と春日城跡がある。春日城の沿革については春日城跡公園内に建てられている記念碑に次のように記されている。

「天文の昔平氏の遠孫栗田口民部重吉の十六代の後裔がこの地に来て城を築く。この城を春日城と言う。城主は在名を氏とし伊那部大和守重慶と言い、始め三百貫文を領して十騎の将であったが次第に増大す。本姓は春日氏であつて伊那地方の重鎮であった。その子但馬守重成が難ぎ更にその長子左衛門尉重近が難いだ。この時次子重国を殿島につかわし殿島城を經營させた。弘治二年武田信玄の為に斬られた郷士の中に春日河内守があるがこれは重親の子であろう。後の城主春日河内守昌吉は高遠城主仁科盛信の麾下の將となる。天正十年織田信忠の大軍の来攻に遇い、城は悉く兵火に罹り炎上した。昌吉は部下を引きつれ高遠城に参じ虎口の門を死守し討死し盛信と運命を共にした。以来この城は再興の主がなく廃城となる。城廻は天然の丘崗を利用して築城したもので規模は広大で、本丸二の丸三の丸は空堀によって分かれている。周囲の北、東、南は渓にのぞんでおり西は大手の位置で広野に接している。城の東方に出丸があるがこれを尾花が崎と言い古来桜の名所として知られている。」

周辺小字には古蓮台、堂ノ上、大声畠、上原、町裏、御射山、城、大手、供養場、尻畠、道下、大道下、清水などがみられる。延喜の東山道が伊勢並遺跡地域の中の春日街道筋を通っていたのではないかという説があり、道下、大道下などの小字がみられることは今後注目していくべき事である。

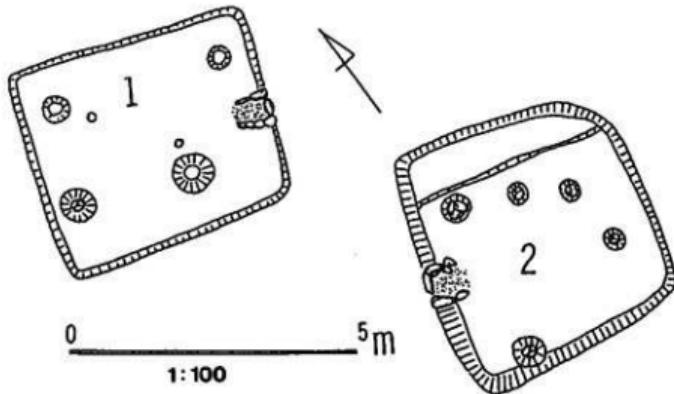
上ノ山遺跡においては昭和43年グランド造成時に住居址が発見されており、当時堀口貞幸氏により調査が行われている。調査記録については以下のとおりである。

「昭和43年2月24日、伊那弥生ヶ丘高校グランド工事で、現場を整地していたブルトーザーが表土より2m下をけずりローム層にかかったところ、黒く落ち込んだ遺構と石組を発見した。直ちに工事中止を要請し、県の社会教育課林主事に連絡し遺物拾得届けと住居址発見届けを市教委に提出した。しかし現場は旧学校農場であり予めボーリングをしない地点であり、縄文式土器の包含地として台帳に登録されていた所で、突然の発見の上、工事は急速に進んでいるので全域の工事を止めることができず、一部の確保にとどまらざるを得なかつた。以下、放課後休日を利用した伊那弥生ヶ丘高校郷土クラブ員の報告記録の抄約である。」

住居址1は、ローム層より30cm落ち込んだ4m×3.6mの長方形のプランの土師式住居址であり、カマドは石組み粘土により固められ1m四方の土師式特有のカマドであり、焼け土が堆積し、平石が落ちこみ、その中から灰釉陶器の甕の破片、須恵器の碗のはば完型品が2ヶと土師器の黒塗りの碗、皿の類が発見された。合計60ヶ余の破片の復原作業が目下進捗中である。

ピットは4ヶあり、ピット3の中には石がつまっており、約30cm余の平石（条痕文あり）がおかれてあった。その他床面全面に小石と粘土が敷きつめてあることを確認することができた。

住居址2 カマドが西を向き、住居址1のカマドと反対であること、北側の壁が二段構えとなっていることなどが特徴であろう。1m四方のカマド内に堆積した焼土の中から多くの土師の碗、皿の破片が発見された。ピットの底部にはいずれも10cm~30cmの方形の石がつめられている。

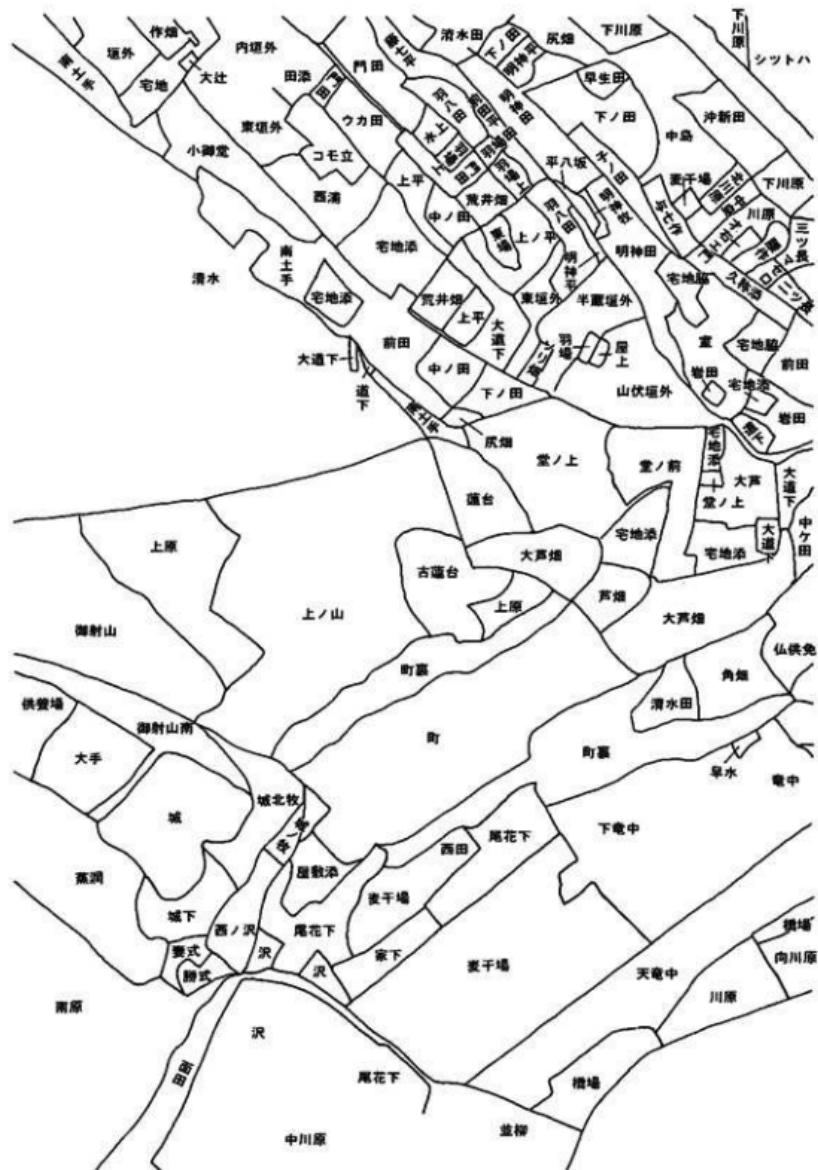


この他住居址1・2の東側に破壊された住居址2ヶを確認し、西側にも2ヶの住居址のあつたことが推定できた。また、道路沿いの西側にも石組み（5m四方）、土師器の破片、無文の弥生式後期の甕の破片が堆積していた。

以上、測量、スライド撮影などの記録資料の作業は可能な限り行なったが、工事進行が早く、どうすることもできないうちに整地され終わってしまった。結論として本住居址は、プラン方形の土師式住居であることと、弥生式初中期を特徴づける土器のみられないことが特色として挙げられよう。現場は三州街道伊那部宿の直ぐ上の段丘の舌状先端部であり、附近には平安期の天台宗創建の円福寺があり、荒川神社、春日神社の中間地点にあたる。奈良、平安期の住居址群が展開していたことを確認しただけであるが周辺には他に造構らしいものもあり調査は進められねばならない地点もある。」

（堀口貞幸　信濃考古第25号）





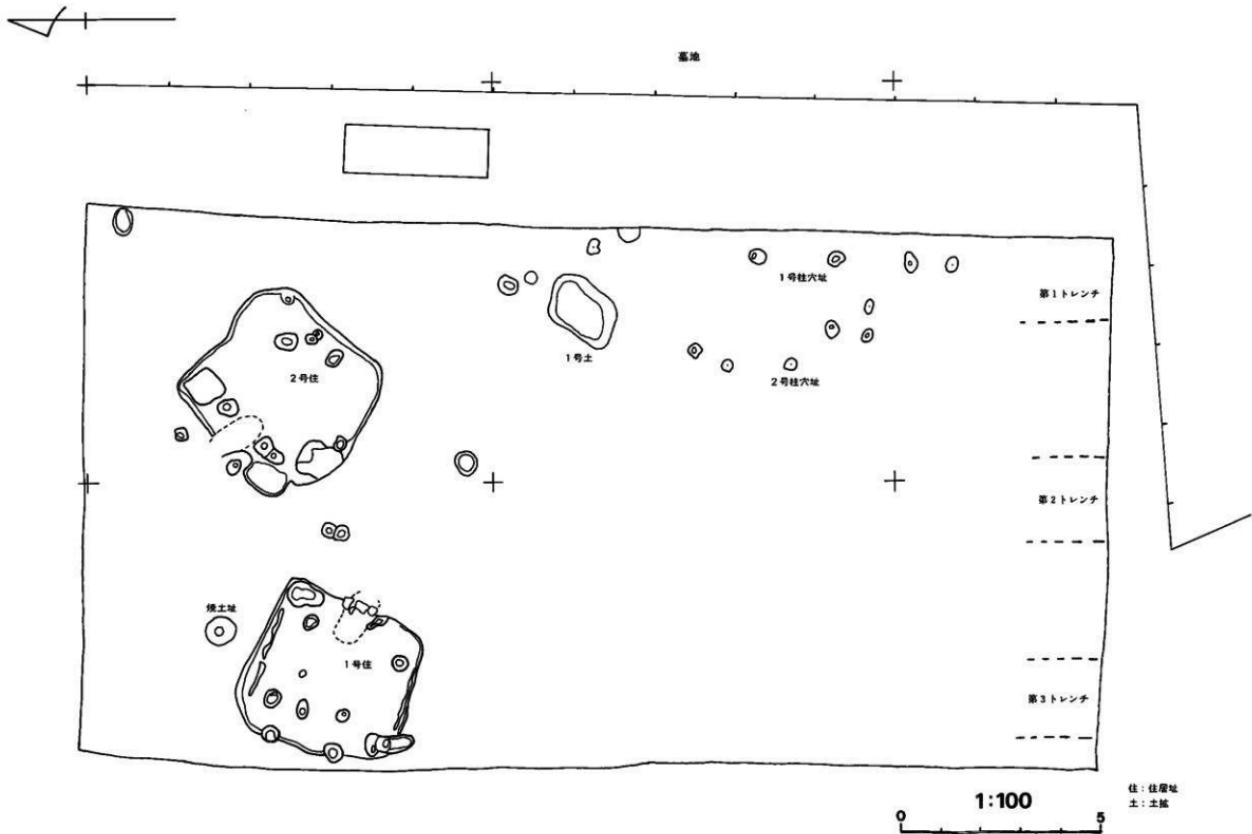
第4圖 周邊小字名圖

表1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代						備考
			先土	绳文	弥生	古墳	奈・平	中近	
1	清水洞	伊那御園		○	○	○	○		
2	宮の前	"	○	○	○	○	○		
3	御園南部	"		○			○		
4	石塚	山寺	○						
5	今泉	"		○			○		
6	原垣外	"		○			○		
7	鳥居原	"		○		○	○		S39 調査
8	高尾	"		○					S46 調査
9	月見松	下小沢	○	○	○		○	○	S43.48.51 調査
10	月見松古墳	"						○	近世経塚?
11	小沢神社	小沢		○					
12	おぐい沢	横山	○			○	○		S51 調査
13	伊那小学校	上荒井坂下		○			○		
14	丸山清水	平沢	○				○		S52 調査
15	小沢原	小沢	○	○					
16	ますみヶ丘上			○			○	○	
17	船窪	船窪		○				○	
18	鼠平1	鼠平	○	○	○				
19	鼠平2	"		○					
20	城烟	大坊		○			○	○	
21	城東	小黒原	○					○	S48 調査
22	ますみヶ丘	伊那小黒原	○						S48 調査
23	赤坂	"		○					S48 調査
24	富士塚	"						○	
25	上ノ山	伊那西町	○			○			
26	伊勢並	伊那小黒原	○	○	○		○		S38. H3調査
27	狐塚北古墳	"				○			径14.40m高3.00m
28	狐塚南古墳	"				○			S50調査 径14.00m高2.10m
29	八人塚古墳	"				○			
30	山の神	"		○	○		○	○	S50 調査
31	小黒南原	伊那西町	○						H3調査
32	ウグイス原	"					○		
33	山本田代	西春近山本	○			○	○	○	S48 調査
34	城平上	"		○			○		S47 調査
35	城平	"		○			○	○	S47 調査
36	宮林	西春近城	○						
37	山の根	"		○	○		○	○	S47 調査
38	常輪寺	山本						○	
39	北条	西春近山本	○		○	○			S49 調査
40	山本	"		○	○				
41	常輪寺下	"		○		○	○	○	S49 調査
42	上村	上村	○	○					
43	上島	下西春近上島		○					
44	上島	西春近上島	○		○	○	○		S48 調査
45	東方B	東方	○						
46	東方A	"	○	○			○		S49 調査



第5図 周辺の道路分布図



第6図 遺構配図

第三章 調査

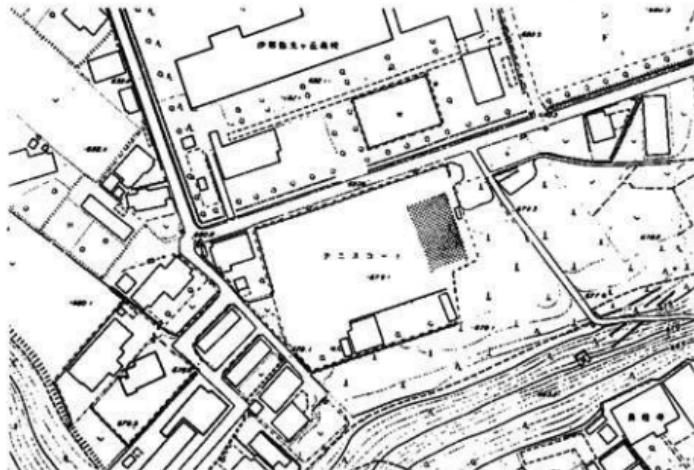
第1節 調査の概要

上ノ山遺跡における今回の発掘調査は、伊那弥生ヶ丘高等学校正門前のテニスコートの一部分を利用し合宿所を建設するのに先立ち行われた。テニスコートは北側部分において高校正門前道路より1.5m程掘り下げて造成されており、今回の調査により遺構の存在が確認されるかどうか最も危ぶまれる状況であった。長野県教育委員会文化課、伊那弥生ヶ丘高等学校との保護協議によりトレンチを設定し、試掘調査を実施することとなった。

テニスコートは北側から南側に向かうに従い徐々に周辺との地形と同位置にもどる地形になつておらず、南北方向にトレンチを3本設定し、トレンチ南側より表土の除去を行つていった。トレンチは東方より第1トレンチとし、第1トレンチ開始点においては表土からテフラ層まで45cmを測るに至った。第2トレンチの12m地点では13cmを測る程度に浅くなつた。試掘調査の結果、第3トレンチ部分から第1号住居址、第2トレンチからは第2号住居址が検出され、本調査を実施する結果となつた。

本調査は表土を全体的に除去した状態で行うものとするため、住居址が確認された北部分を調査地区のA地区とし、南部分をB地区とした。A地区より表土の除去を全体的に行つた。

調査の結果平安竪穴式住居址2軒、柱穴址、土塙等が検出され、縄文時代中期土器・土師器・灰陶陶器・石器などの出土があつた。



第7図 調査範囲設定図

第2節 遺構と遺物

第1号住居址

遺構（第8図・図版3）

本住居址は第2号住居址の南に位置している住居址である。住居址のプランは隅九方形で、その規模は東西4.0m、南北4.0m。

長軸（カマド）の方向はS E 89°を測る。壁高は以前に造成された時にテフラ面をかなり削り取られているところから、住居址の堀り込みだけでは壁高を測定できないが、現在残った壁高は東側で16cmで直壁に近い。

南壁は8cmを測り、直壁である。柱穴はP1・P2・P3

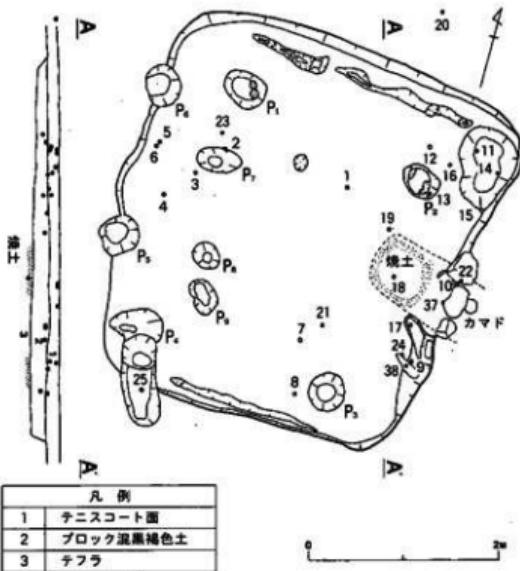
3・P4の4柱と考えられる。

また、P7・P8は入口の柱と推定される。

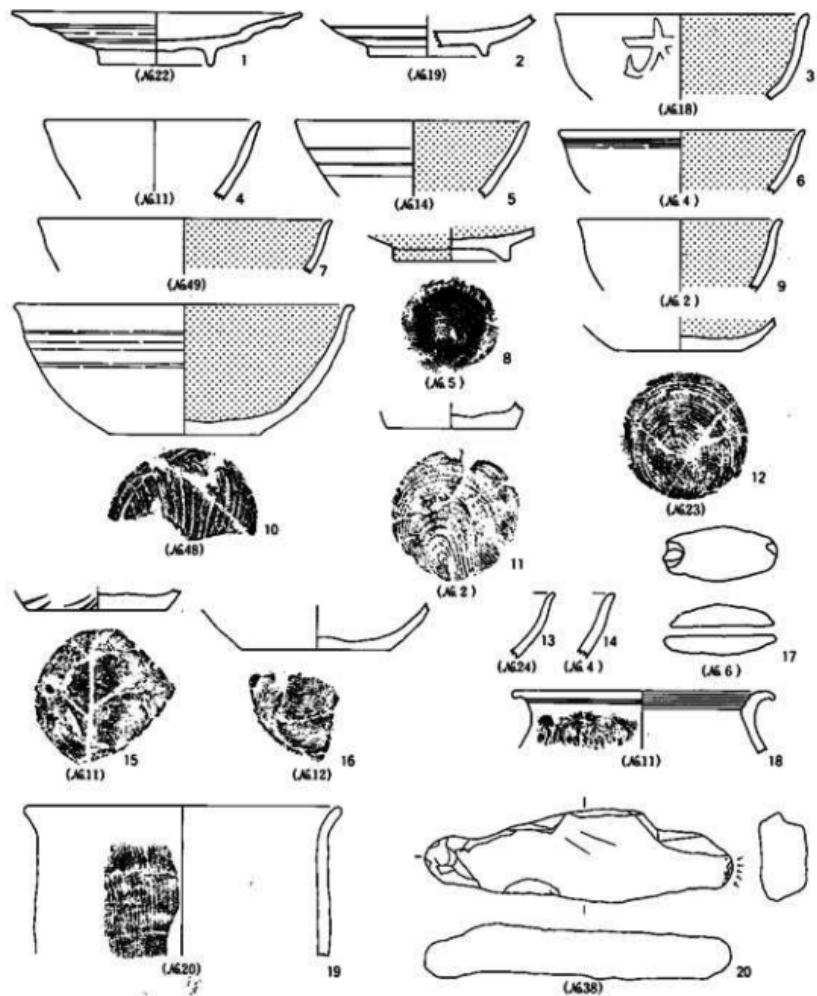
周溝は北側と南側に検出された。カマドは北壁中央に造られているが、石芯のカマドである。カマドの中からは灰釉の皿Na22が出土した。床面は堅緻の方で小ビットが穿たれている。

遺物（第9図・図版7・8）

1は灰釉陶器皿、付高台。釉は内側のみで薄緑色。環投産折戸53。2は灰釉陶器皿、付高台。釉は内側のみで薄い灰緑。環投産折戸53。3は土師器碗で内黒墨書。文字は判読できない。上ノ山遺跡では初見である。（平安）4～7・9は土師器の碗。（平安末）8は土師器碗、付高台で器面全体が黒色である。底部に糸切痕が見られる。（平安とを考えられる）10は土師器鉢内黒で底部に糸切痕が見られる。（平安末とを考えられる）11は土師器の底部で器形不明。糸切痕が見られる。（平安末とを考えられる）12は土師器皿底部内黒で、糸切痕が見られる。（平安末）13・14は土師器内黒の碗。（平安末）15は土師器皿の底部で木ノ葉痕が見られる。（平安）16は土師器碗、底部に糸切痕が見られる。（平安）17は土鍾、長さ3.9cm中央径1.7cm、穴の径3.5mm～4mm両端が9mmと細くなっている。18は土師器皿の口縁部で反りが強く、器面にカキ目文が見られる。（平安末）19は土師器皿の口縁部で器面にカキ目文が見られる。（平安末）20は粘盤岩の敲打器（早川）



第8図 第1号住居址実測図



第9図 第1号住居址出土遺物実測図 1~9 (1:3) 10 (1:4) 11~16 (1:3) 17 (1:2) 18 (1:3) 19,20 (1:4)

第2号住居址

遺構 (第10図・図版3)

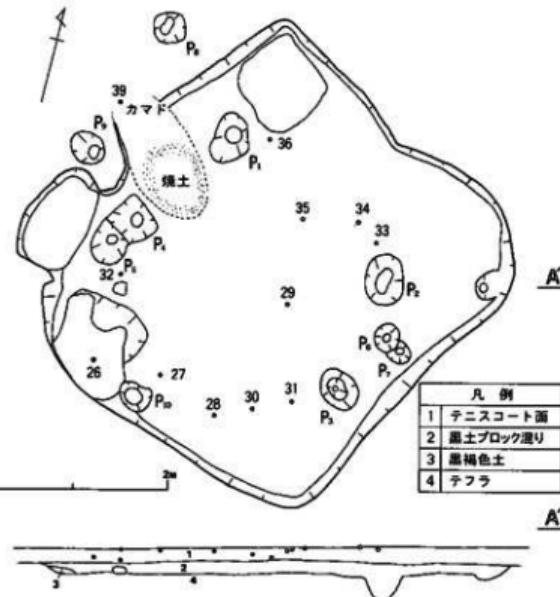
本住居址の規模は東西4.1m、南北4.2mの不整の隅丸方形の住居址である。この住居址も第1号住居址と同様にグランド造成時に住居址面すれすれまで切り取られ、住居址の掘り込みが僅かに認められる程度の状態で検出された。柱穴はP1・P2・P3・P4の4柱と考えられる。

その他P5は南東の隅に東西90cm×90cm、深さ23cmの掘り込みが検出された。床面には北壁に接し、P6・P7・P8の小ピットも検出されている。本住居址のカマドはほとんど造成時に削り取られ、カマドの範囲の焼土が残るだけとなっていた。床面は一部堅く叩かれていたが、大半は擾乱された状態であった。

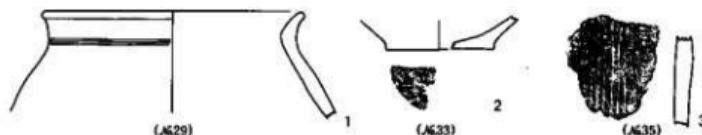
遺物 (第11図・図版7・8)

1は土師器裏、口縁部で器面にロクロ痕が見られる。(平安末) 2は土師器の底部。器形は不明であるが糸切痕が見られる。(平安末) 3は土師器裏の破片。器面にカキ目文が見られる。(平安末)

(早川・友野)



第10図 第2号住居址実測図



第11図 第2号住居址出土遺物実測図 (1:3)

第1号土塙

造構 (第12図・図版4)

本址は第2号住居址と柱穴址との中間点で調査範囲の東端に検出され、長径180cm短径125cmを測り、深さは30cmとなる。

遺物 (第15図・図版8)

1は土師器内黒碗破片と考えられ、外面にロクロ痕が見られる。(平安末と考えられる) 2は須恵器碗破片で外面にロクロ痕が見られる。(平安末) 3は緑色岩磨製石斧。(時期不明)

第1号柱穴址 (第13図・図版4)

本址は調査区画として墓地に接している東北に検出された造構である。南側に対応する造構が認められないことから、おそらく東側の墓地に接した

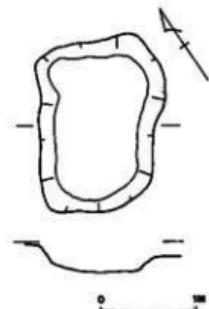
所にあるのではないかと

推測される。建物の規模は東西4.8mを測る。

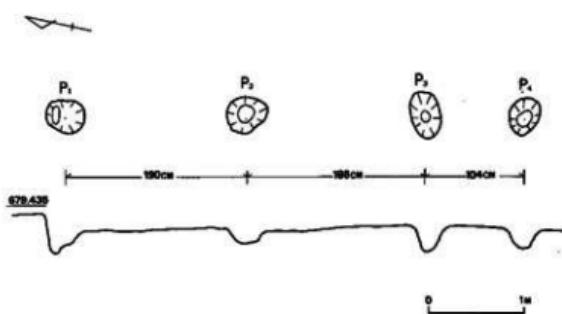
P1-P2の柱間間隔は190cm、P2-P3の柱間間隔は186cm、P3-P4の間隔は104cmを測る規模である。建物の主軸の方向はN12°Eである。これだけの造構で建物の規模を推定することができないが、柱間の間隔から平安時代ころの建物造構と考えられる。

第2号柱穴址 (第14図・図版4)

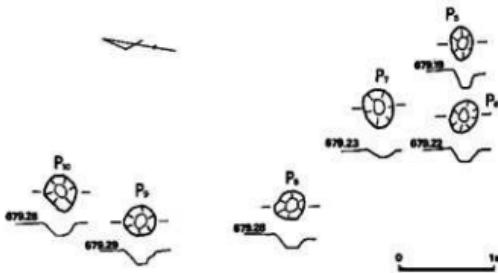
本址は一部に古代的な柱間間隔が認められる。P5-P7柱間は110cmと古代掘立建物址の許容範囲にある間隔で、P8-P9も135~160cmを測るところから、やや広いが容認できる範囲である。全体としてまとまらないが記録にとどめておく必要があると思われる。



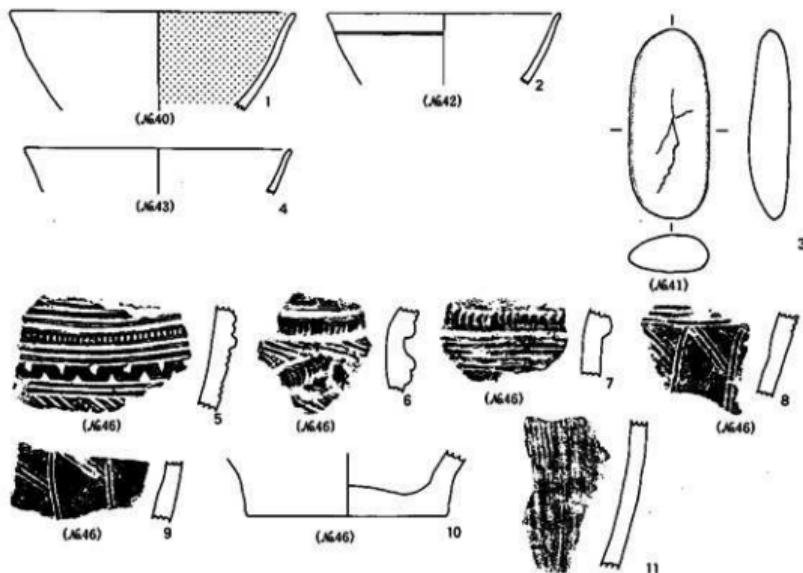
第12図 第1号土塙実測図



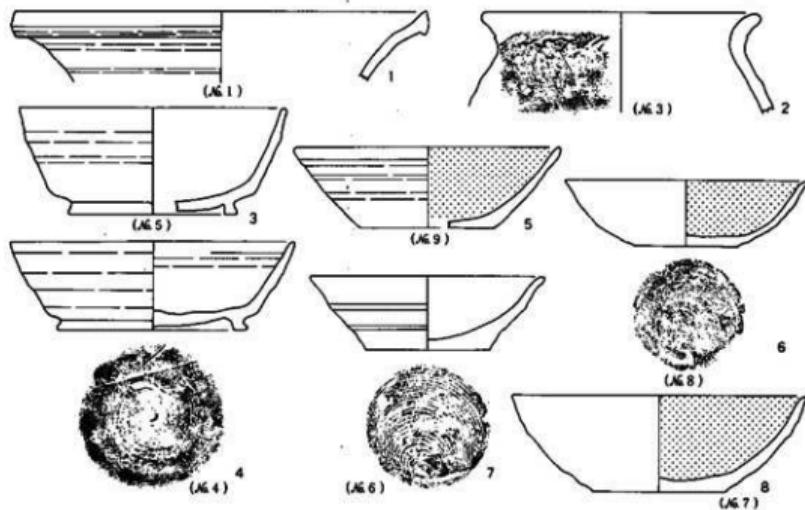
第13図 第1号柱穴址実測図



第14図 第2号柱穴址実測図



第15図 第1号土塁・B地区出土遺物実測図 (1 : 3)



第16図 昭和43年調査時出土遺物実測図 (1 : 3)

その他出土遺物

ピット（第15図・図版8）4は須恵器碗の破片。外面にロクロ痕が見られる。（平安末）

B地区（第15図・図版7）5は斐部破片。隆帯に刻目文・平行竹管文・三角文が施された土器（縄文中期中葉Ⅲ期）6・7は隆帯に爪形文・平行竹管文が施された斐形土器（縄文中期中葉Ⅲ期）8・9は竹管文が施された斐の破片（縄文中期後葉Ⅰ期）10は笠削り痕の残る斐の底部（縄文中期中葉）11は地文に浅い平行沈線文が施された斐の破片（縄文中期中葉）

昭和43年調査時遺物（第16図・図版10・11）1は灰釉陶器の口縁部破片。形状から黒窓90の平瓶と考えられる。2は土師器斐の口縁部。器面にカキ目痕が見られる（平安）3は須恵器付高台の碗。須恵縦年ではTK7に比定したいところである。4は須恵器付高台の碗。底部に糸切痕が見られる。（TK7）5・6は糸切痕の内黒碗（平安末）7は土師器糸切痕のある碗（平安末）8はわずかに糸切痕の見られる土師器碗（平安末）

（早川・友野）

表2 出土遺物

発掘番号	出土地所	種別	遺物No.	実測No.	回収No.	地文
1	1 号住	灰釉陶器 瓶	22	9-1	7-2-3	平矢
2	1 号住	灰釉陶器 瓶	19	9-2		
3	1 号住	土師器 (内黒) 瓢	18	9-3	8-1	縄豆
4	1 号住	土師器 瓢	11	9-4		
5	1 号住	土師器 (内黒) 瓢	14	9-5		
6	1 号住	土師器 (内黒) 瓢	4	9-6		
7	1 号住	土師器 (内黒) 瓢	49	9-7		カマド内
8	1 号住	土師器 (内黒) 瓢	5	9-8	8-4	壁部
9	1 号住	土師器 (内黒) 瓢	2	9-9		
10	1 号住	土師器 (内黒) 鉢	48	9-10	7-1	カマド内
11	1 号住	土師器 鉢	2	9-11		底部糸切痕
12	1 号住	土師器 (内黒) 鉢	23	9-12	8-2	底部糸切痕
13	1 号住	土師器 (内黒) 瓢	24	9-13		
14	1 号住	土師器 (内黒) 瓢	4	9-14		
15	1 号住	土師器 瓢	11	9-15	8-3	底部木ノ原紋
16	1 号住	土師器 瓢	12	9-16		底部糸切痕
17	1 号住	土瓶	6	9-17	8-5	
18	1 号住	土師器 瓢	11	9-18		カ今日文
19	1 号住	土師器 瓢	20	9-19		カ今日文
20	1 号住	敲打器	38	9-20		粘盤砂
21	2 号住	土師器 瓢	29	11-1		
22	2 号住	土師器 鉢	33	11-2		底部糸切痕
23	2 号住	土師器 瓢	35	11-3	7-9	カ今日文
24	2 号住	須恵器 瓢	36	6-1		
25	2 号住	打製石斧	31	8-12		高砂帶
26	2 号住	須恵器 瓢	35	8-6		印目
27	2 号住	土師器 (内黒)	アケ土	8-7		
28	2 号住	土師器 (内黒)	32	8-8		
29	2 号住	土師器	27	8-9		カキ目文
30	2 号住	土師器	33	8-10		
31	2 号住	土師器	34	8-11		底部糸切痕
32	1号土塗	土師器 (内黒) 瓢	40	15-1	8-15	
33	1号土塗	須恵器 瓢	42	15-2	8-14	
34	1号土塗	磨製石斧	61	15-3	8-13	緑色斑
35	B 地区	縄文中期中葉土器	46	15-5	7-4	
36	B 地区	縄文中期中葉土器	46	15-6	7-6	
37	B 地区	縄文中期中葉土器	46	15-7	7-5	
38	B 地区	縄文中期後葉土器	46	15-8	7-7	
39	B 地区	縄文中期後葉土器	46	15-9	7-8	
40	B 地区	縄文中期中葉土器	46	15-10		
41	ピット	須恵器 瓢	43	15-4	8-16	
42	焼土塗北	土師器 瓢		15-11		カ今日文
43	焼土塗北	土師器 瓢			8-19	
44	焼土塗北	土師器 瓢			8-20	カ今日文
45	焼土塗北	土師器			8-21	カ今日文
46	焼土塗北	土師器			8-22	
47	焼土塗北	須恵器			8-17	
48	焼土塗北	須恵器 瓢			8-18	
49	S43887	土師器 瓢	1	15-1		口跡部
50	S43887	土師器 瓢	3	15-2	10-3	
51	S43887	須恵器 瓢	5	15-3	10-3	
52	S43887	須恵器	4	15-4	10-2	
53	S43887	土師器 (内黒) 瓢	9	15-5	11-2	底部糸切痕
54	S43887	土師器 (内黒) 瓢	8	15-6	11-1	底部糸切痕
55	S43887	土師器 瓢	6	15-7	10-4	底部糸切痕
56	S43887	土師器 (内黒) 瓢	7	15-8	11-3	

ま　と　め

今回の伊部弥生ヶ丘高等学校合宿所建設に伴う発掘調査において知り得た二、三の問題点を述べてまとめてみたい。

この上ノ山遺跡は昭和43年にグランド造成工事の折りに堀口貞幸氏により調査が行われたもので、その成果は記録保存とし「信濃考古」に掲載された。それによると、第1号住居址の規模が $4.0\text{m} \times 3.6\text{m}$ 方形でテフラ層に掘り込んでつくられ、東側壁に石組の粘土ガマが設けられ、そのカマド及び住居址内からは土師器、須恵器、灰釉陶器などが出土した。第2号住居址の規模は4mの方形の竪穴式住居で、住居の壁には粘土ガマが西向きに設けられた一般的な土師式の住居址である。出土した遺物は土師器の碗・皿などである。そのほか第2号住居址の西側には2軒の住居址と、弥生後期の遺物が確認されている。また、調査した住居址の東側にも破壊されていたが、住居址が確認されている。

前回の調査による住居の向きは西向きであるのに対し今回の調査では南向きと北向きの2軒で、いづれも異なる方向を示していることより集落の構成を考える上で問題が生じてくる。出土した遺物より、前回の住居の方がやや先行するようである。

その他の遺構としては平安末期と考えられる第1号土塙が検出された。土塙内からは土師器内黒の碗の破片、須恵器等が確認された。

第1号柱穴址は、調査範囲の東壁に接して検出され、おそらく用地外に抜がるものと推測される。出土遺物から平安時代後期と考えられ、柱列の規模から倉庫的な建物ではないかと考えられる。

今回の調査を通じて上ノ山遺跡は縄文中期中葉の集落址をはじめとして、弥生後期・奈良平安時代のかなり規模の大きい集落址を想定し得る貴重な資料を得ることができた。

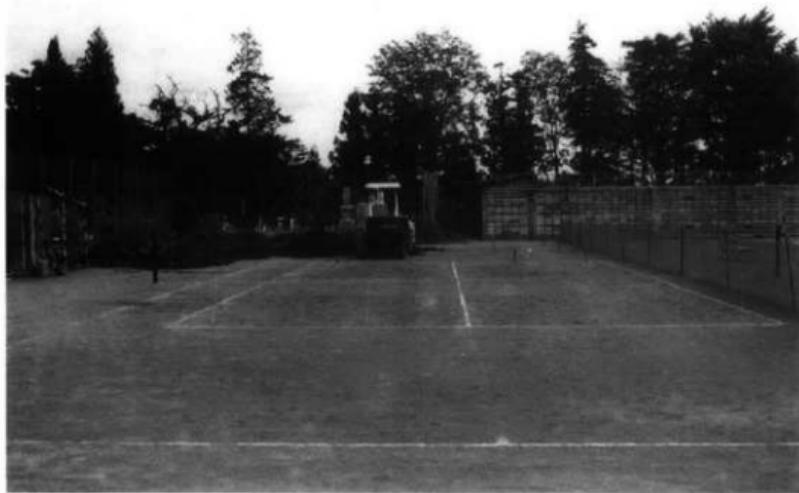
これら平安時代の村が基調となって、伊部部の宿場の北端には平安時代創建と伝えられる天台宗の宝樹山蓮華院圓福寺がある。近くには春日神社、荒井神社などが中世を下らない神社も見受けられる。また孤塚北古墳・孤塚南古墳など6~7世紀にかけての古墳が分布している。これら古墳の近くには旧石器、縄文時代早期・前期・中期・後期などの遺物が確認されている伊勢並遺跡がある。上ノ山遺跡周辺には平安時代によく使われた大道下・御射山などの小字も見受けられる。地名も今後さらに研究し平安時代の集落のあり方を調査していきたい。

第1号住居址からは墨書きの土師器内黒碗が発見され、問題となってきた。この土器は小片のため字体を読み取れないが、上ノ山遺跡では初見であり今後この解読に望みをつなぎたい。

終りに伊部弥生ヶ丘高等学校の三沢校長、大久保事務長ほか職員の方々にはいろいろとご指導ご協力を賜り、厚く御礼申し上げる次第であります。

調査団長　友野良一

図 版



試掘調査状況



試掘調査状況



A 地区調査状況



B 地区調査状況



第1号住居址



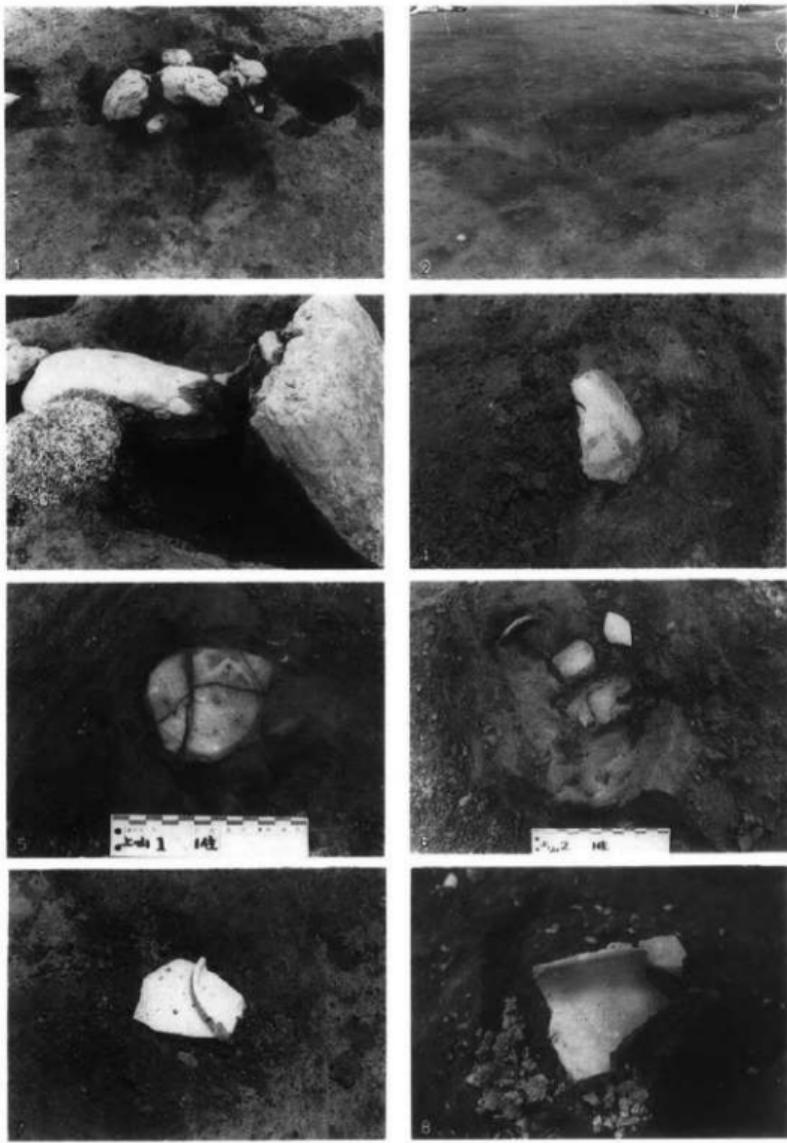
第2号住居址



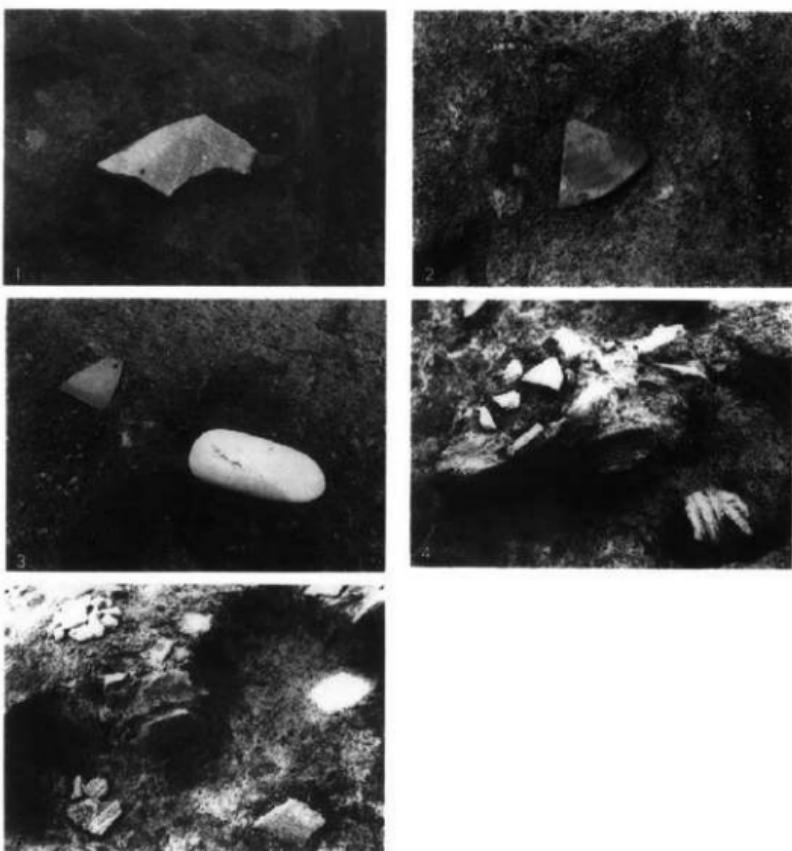
第1号土塁



柱穴址群



1. 1号住カマド 2. 墓土址 3. 1号住(M648)土師器鉢 4. 1号住(M618)土師器内黒墨書
5. 1号住(M623)土師器 6. 1号住(M62)土師器 7. 1号住(M619)灰釉陶器皿 8. 2号住(M629)土師器甕

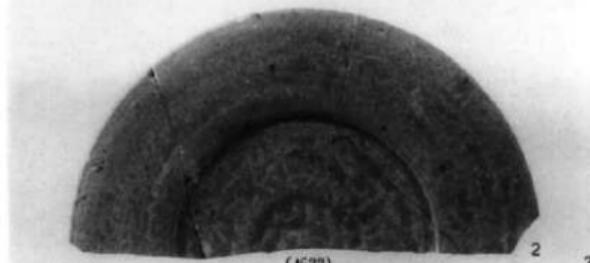


1. 2号住(M636)須恵器甕 2. 1号土塗(M640)土師器碗 3. 1号土塗(M642)須恵器(M641)磨製石斧
4. B地区(M646)繩文中期土器 5. B地区繩文中期土器



(A648)

1. 1号住 土師器(内黑)鉢



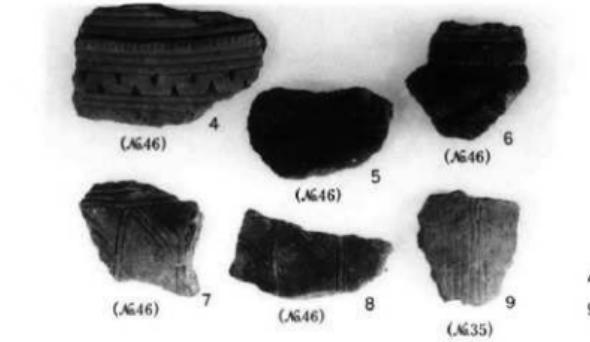
(A622)

2. 1号住 灰釉陶器皿(表)



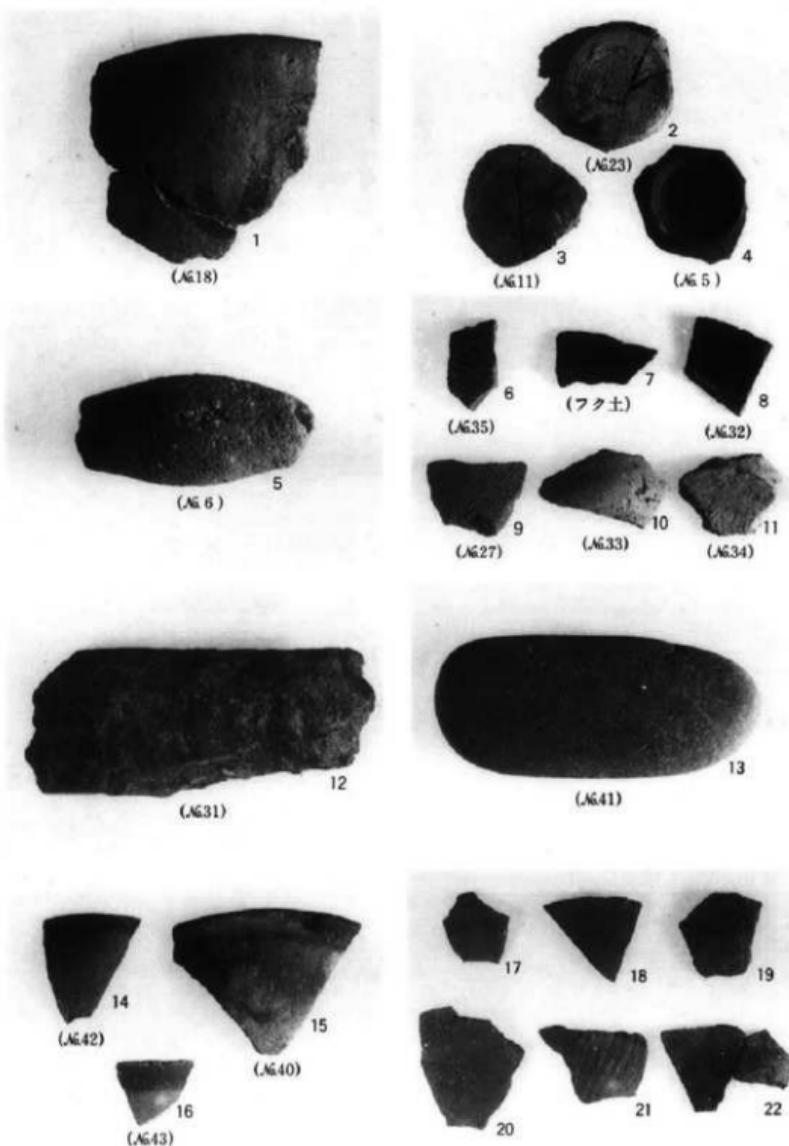
3

3. 同(裏)



4.~8. B地区縄文中期土器

9. 2号住土師器



1. 1号住土師器墨書き 2. 1号住土師器皿 3. 1号住土師器甌 4. 1号住土師器碗 5. 1号住土鍤
 6. 2号住須恵器 7. 8. 2号住土師器(内黒) 9.~11. 2号住土師器 12. 2号住打製石斧
 13. 1号土塙磨製石斧 14. 1号土塙須恵器碗 15. 1号土塙土師器碗 16. ビット須恵器碗
 17.18 試掘須恵器 19.~22. 燻土址北土師器



遺跡説明会



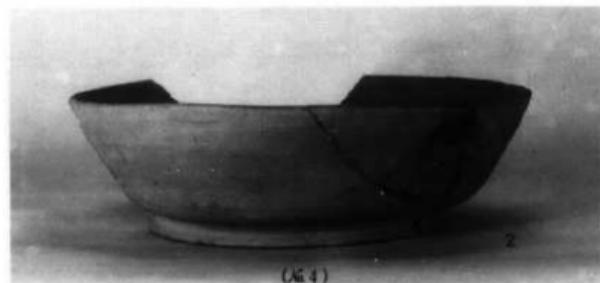
発掘調査に参加された人々

昭和43年調査時出土遺物



(A6.3)

1. 土師器甌



(A6.4)

2. 須惠器碗



(A6.5)

3. 須惠器碗



(A6.6)

4. 土師器甌



1

(No. 8)

1. 土師器（内黒）碗



2

(No. 9)

2. 土師器（内黒）碗



3

(No. 7)

3. 土師器（内黒）碗

参考文献

上伊那教育会	「先史及び原始時代の上伊那」	1926
上伊那教育会	「上伊那誌」	1965
堀口貞幸	「伊那市伊那上の山遺跡発見の住居址」信濃考古第25号	1968
伊那市史刊行会	「伊那市史」歴史編	1974
長野史刊行会	「長野県史」考古資料編全1巻(三)	1981
伊那市教育委員会	「小黒南原・伊勢並遺跡」	1992

上ノ山遺跡

—緊急発掘調査報告書—

平成5年3月 発行

発行 長野県伊那弥生ヶ丘高等学校
伊那市教育委員会

印刷 小松総合印刷所
